

# 日本の装幀の歴史 1

冷泉家時雨亭調査主任 藤本 孝一

「本」は大きく印刷物と写本とに分けられる。印刷物には、木に彫った版本、鉛に鑄造した活字本、現代のプリントした本などがある。この分野を体系化したのが書誌学である。

書誌学が学問として成立したのは、印刷本により本文が固定され、同一の本が多部数出版されたことで、類型化・体系化が可能になったことによる。

他方、写本の書誌においても、印刷物と名称等を同じくして論じられている。しかし、写本は書写者の個性により、書き方も一冊一冊相違する。たとえば『古今和歌集』でも国宝の藤原定家筆本をはじめ六条藤家本や二条家本などが大量に伝存するが、百冊の写本があれば百の個性があり、成立した時代も異なる。このような曖昧性を内包している写本は、学問として体系化するのが大変難しい。

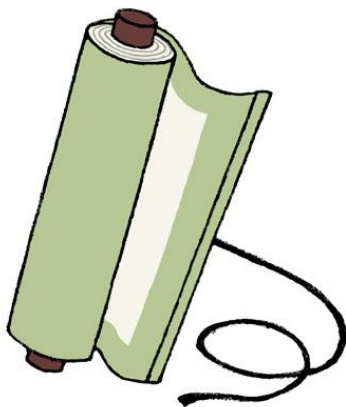
写本の曖昧性の壁を、どのように克服するべきか。時雨亭文庫の歌書類を一丁一丁めくって調査をしているうちに、段々と固まってきた。本を「装丁された記録装置」と定義し、装訂を研究することで、親本を写す時の個性による曖昧性が排除され、写本学を確立できると思い至った。また、一見矛盾するようだが、曖昧性を書写者の個性と考えると、製作者の意図が表れて学問対象にもなり得る。このような視点から、装訂の歴史と写本の作り方を論述して行きたい。

## 形態と名称

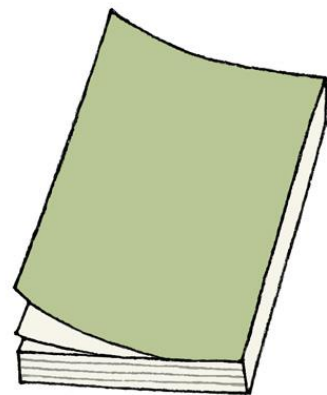
本の装訂名称は古くから統一されていなかったため、1934年に書誌学会が用語を統一した。特にそれまで「胡蝶装（蝴蝶装）」「列帖装」などバラバラに呼称されていた装訂を「綴葉装」の名称に統一した。本稿も、それに倣っている。

本の形は、卷子装（巻物）と冊子装の二つに分けることができる。

★ 図① 卷子



★ 図② 冊子

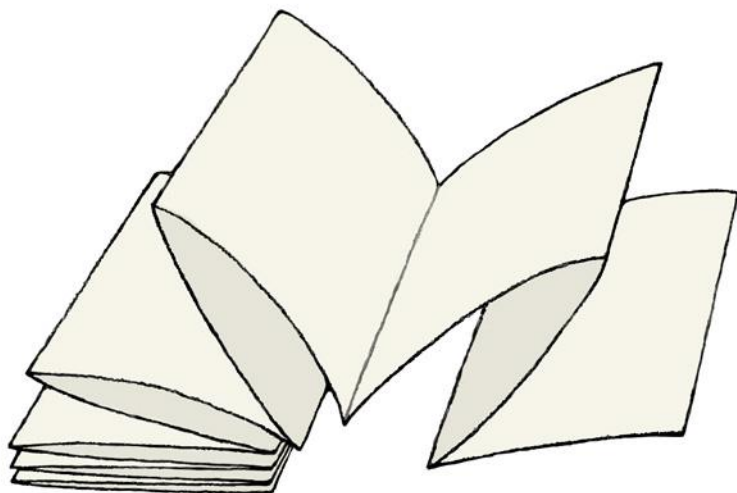


装訂を記述する前提として、形態と名称を図版で示す。成立論で詳述するが、装訂の綴じ方は二つの系統に分けられる。Ⅰ糊付とⅡ糸綴である。

Ⅰ 糊付— 紙を継いで行く系統。

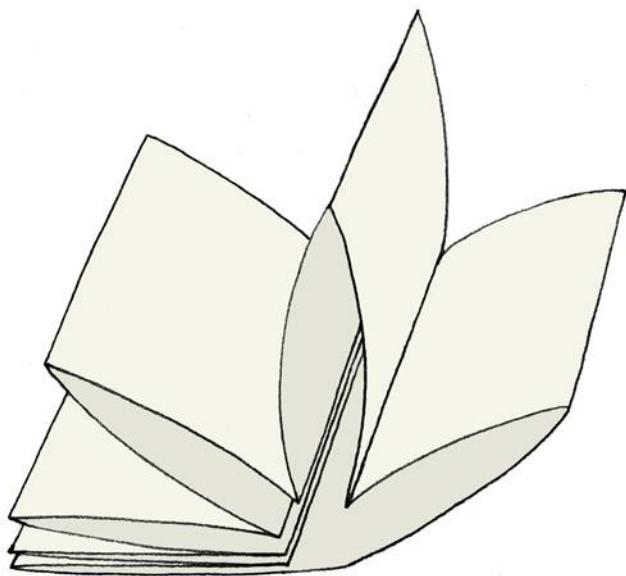
1 折本装— 卷子を均等に折って、蛇腹にした本。

★ 図③ 折本



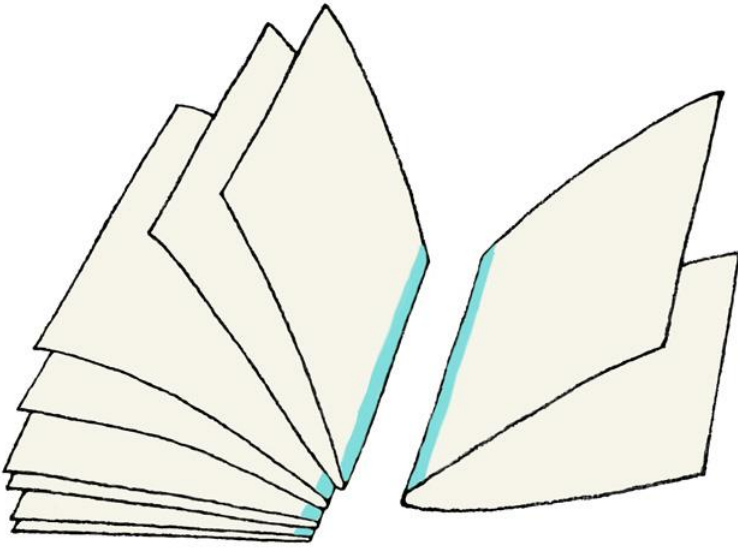
2 旋風装— 折本に表紙を付けた本。または折本の両端を糊付(展開すると輪の状態)にした本。

★ 図④ 旋風装



3 粘葉装— 料紙を半分に折って折谷の外側を互いに糊付けした本。

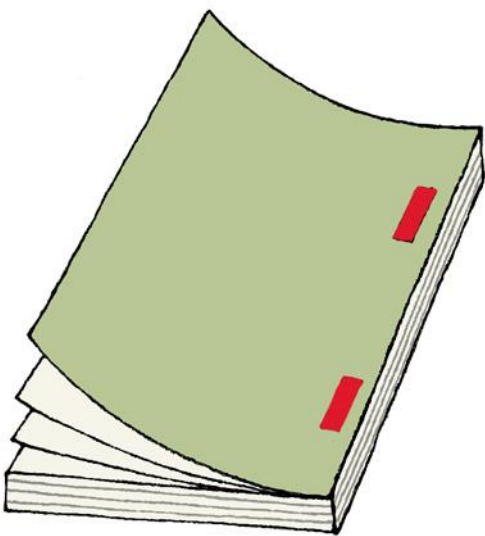
★ 図⑤ 粘葉装



II 糸綴— 紙を重ねて糸で綴じる大和綴と線装綴の系統。

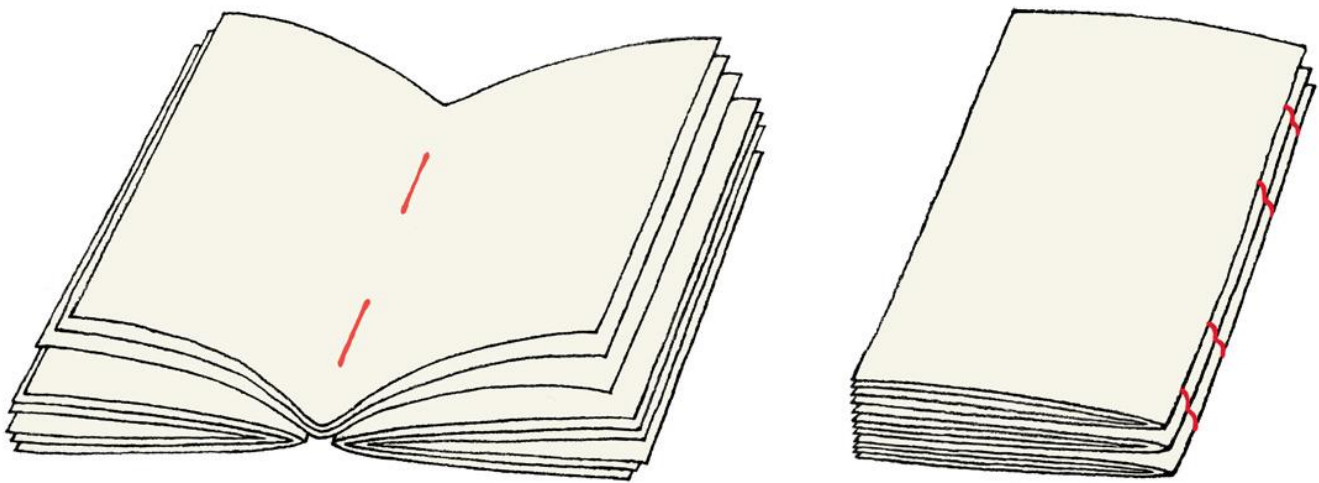
1 列状装— 一枚の紙を重ねて大和装にした本。時雨亭文庫に為家自筆本『七社百首』（叢書第十卷『為家詠草集』所収）一帖がある。料紙を単に重ねただけの大和綴の冊子本である。この一枚重ね状態の本の用語がなかった。用語をさがすと、鎌倉時代中期写本で粘葉装『経信卿家集』（叢書第二十三卷『平安私家集十』所収）の表紙綴じ糸に、冷泉家第十四代為久（1686—1741）が付箋を結んで「元列帳閉ノ本也」と注記している。この「列帳」から、筆者が造語した。「列」の文字は綴葉装や粘葉装にも用いられ、「一丁」を意味する。そこで、一枚重ねの状態を「列状」と表現した。

★ 図⑥ 列状装



2 綴葉装— 料紙を半分に折って重ねて括を作り、折本に糸を通して括を綴じた本。

★ 図⑦ 綴葉装



3 袋装— 料紙を半分に折って両端を重ねて袋状にして綴じた本。大和綴の本と、一本の糸で綴じた線装綴の本がある。

★ 図⑧ 袋綴

